ささやかな夢の跡　―浜松野外美術展の記録―

Report on the "Hamamatsu Open-air Exhibition"

尾野　正晴
文化政策学部芸術文化学科
Masaharu ONO
Department of Art Management
Faculty of Cultural Policy and Management

「浜松野外美術展」は、「びわこ現代彫刻展」と並んで、水辺で開催された我が国の代表的な野外美術展である。ふたつの展覧会は現在忘れられているが、本稿は、彫刻（立体）だけではなく、ビデオアートやパフォーマンスなども取り込んだ「浜松野外美術展」について、可能なかぎり正確な記録を作成したはじめての報告書である。

Hamamatsu Open-air Exhibition is the typical open-air exhibition of our country held in the water side together with the Exhibition of Contemporary Sculpture Biwako. Both exhibitions are forgotten now, but the first accurate record was made in this report about Hamamatsu Open-air Exhibition, which not only sculpture but also video-art and performance were included.

以下の記録に見るとおり、「浜松野外美術展（の前身）」は 1980 年にはじまったが、翌年の 1981 年には、「第 1 回びわこ現代彫刻展」がはじまっている。神戸（1968 年～）と宇部（1965 年～）の現代彫刻展を代表的な例として、それまでの野外美術展の多くは公園を背景としていたが、海辺（浜松野外美術展）と湖畔（びわこ現代彫刻展）の違いはあるとはいえ、双方はいずれも水を背景にした野外美術展である。公園にしても水辺にしても、作品が置かれる場としてはそれなりの面白さがあるだろうが、制作する側からすれば、水辺の方が制約が多いかもしれない。たとえば、塩分を含んだ大気のもとでは、使用できる素材も限られるし、町中でも強風が吹き荒れる浜松のような地域では、作品の形態にも配慮する必要がある。ただ、こうした制約を逆手にとって制作するのが美術家の美術家たる所以である。現に、「浜松野外美術展」でも過酷な自然に負けない（というか、自然に寄り添った）作品が数多く見られた。

水辺で開催されたふたつの野外美術展には、その他にも共通点がある。行政が町おこしの一環として仕掛けたプロジェクトではなく、地域に在住する美術家たちが組織した展覧会だったということである。もっとも、「びわこ現代彫刻展」が地元の自治体等から少なからぬ財政的な支援を受けていたのに対して、「浜松野外美術展」は参加した美術家たちの費用でまかなわれていた。詳しく調べたわけではないが、コンクールの大賞賞金が 400 万円であったことなどから類推して、前者の開催費用が相当な金額にのぼったことは間違いない。一方、後者はといえば、残された会計報告を見ると、美術家相互で話し合われた金額など気の毒で掲載できないほどである。開催費用の多寡と展覧会の内容が正比例するわけではないが、かといって相関関係がないわけではない。イサム・ノグチをはじめとする豪華な審査員、会場構成は安藤忠雄とくれば、前者が今後も語り継がれる可能性はある（現実にはそうなっていない）が、後者は意に反してローカルな展覧会にとどまるしかないだろう。

「浜松野外美術展」を誇らしく思う関係者が強調するのは、自分たちだけで立ち上げた展覧会ということだが、おそらく、今ならそれを快挙と呼ぶことはできないかもしれない。文化的な事業を開催するにあたって、お役所や企業からお金をもらうのは当然という風潮のもとでは、町おこしを目指したわけでもなく、外部のスポンサー（とりわけお役所）にも頼らず自力で開催しようとした「浜松野外美術展」など、悪しき展覧会の見本と一蹴されるからである。だが、私には、それもまた、美術家の心意気を示す展覧会の立ち上げ方のひとつと思えてならない。お金集めの苦労をとおして深まる関係もあるし、はやりの物言いをすれば、お金集めの段階から展覧会がはじまることも確かだが、おそらく、当時にあっては、そうした心意気に共感した美術家もいたはずだ。

展覧会の名称と中味を注視すれば分かるとおり、「浜松野外美術展」には、彫刻（立体）だけではなく、ビデオ作品やパフォーマンスも出品されていたし、戦後の現代美術を代表する美術家（たとえば、戸谷成雄、遠藤利克）の若き日の姿も認められる。「びわこ現代彫刻展」よりはるかに実験的な展覧会（望月良枝によれば、作家自身の制作姿勢を問い直すための実験の場）であったのである。継続は力なりという言葉どおり、展覧会を 7 年も続けた美術家たちの労は評価されねばならないが、こうした先駆的で野心的な

展覧会が地元の美術家にもたらしたものは何だったのか。微風とはいえ、浜松にも確かに風は吹いたのだが、この地には今なお美術家は育っていない。「浜松野外美術展」の主たる会場であった中田島砂丘は今浸食が進み、1970 年代に埋めたゴミの流出問題で悩んでいる。そこには、「・・・この野外展に参加した作家が残したもの、あるいは、もちかえったものが重要であろう・・・」（1987 年）という、今井瑾郎（展覧会の仕掛人のひとり）の総括が空しく響くのみである。

記録のなかで、ビデオについては、展覧会図録に掲載されているものだけを作品とし、それ以外のものは展覧会の記録とした。また、記録の作成に際しては、望月良枝、金田正司の両氏をはじめとする多くの方々に、参考図版の提供については、望月良枝、山本糾の両氏に、それぞれご協力をいただいた。凡例およびお礼として記しておきたい。見てのとおり、記録のなかには、不明の項目や未確認の項目も多々あるが、それらを補うことは今後の課題である。新しい情報が得られ次第、加筆、訂正してゆきたいと思う。

注：本研究に当たって「静岡文化芸術大学平成 15 年度文化政策学部長特別研究費」を受けた。

1980 年

第 1 回浜松野外美術展（の前身）
8 月 31 日　今切海岸
今井瑾郎、今井由緒子、金田正司、中村ミナトによる公開制作

＜関連記事＞
中村英樹「今井瑾郎野外展 - 空間の表皮に向けて」（いけばな『龍生』1981 年 1 月号）

1982 年

第 2 回浜松野外美術展
6 月 4 日～ 7 日　今切海岸
今井瑾郎、今井由緒子、金田正司、加茂博、竹田康宏、田中睦治、中村ミナト、保科豊巳

＜関連展示＞
＊第 2 回浜松野外美術記録展
8 月 23 日～ 9 月 4 日
ギャラリー葉（東京）
10 月 2 日～ 16 日
ギャラリー 79（名古屋）
11 月 15 日～ 20 日
ギャラリー白（大阪）
今井瑾郎、今井由緒子、金田正司、加茂博、竹田康宏、田中睦治、中村ミナト、保科豊巳（写真撮影：山本糾）

＜関連記事＞
中村英樹「一昨年の夏の記憶から」（『第 2 回浜松野外美術展』図録）

1983 年

第 3 回浜松野外美術展
6 月 1 日～ 5 日　中田島砂丘
今井瑾郎、今井由緒子、金田正司、竹田康宏、田中睦治、辻耕治、遠山香苗、戸谷成雄、中村ミナト、保科豊巳、ビデオ：有村森文、足立岳、伊藤桂吾

＜関連展示＞
＊第 3 回浜松野外美術展へ向けてのプラニング展　4 月 25 日～ 5 月 7 日　ギャラリー U（名古屋）
今井瑾郎、今井由緒子、金田正司、竹田康宏、田中睦治、遠山香苗、戸谷成雄、中村ミナト、保科豊巳
＊第 3 回浜松野外美術記録展
7 月 4 日～ 16 日　ギャラリー葉
7 月 22 日～ 8 月 3 日　西武百貨店浜松 CITY8
今井瑾郎、今井由緒子、金田正司、竹田康宏、田中睦治、辻耕治、遠山香苗、戸谷成雄、中村ミナト、保科豊巳（写真撮影：山本糾）

＜関連記事＞
中村英樹「野外美術の論理」（『第３回浜松野外美術展』図録）
「作品と自然がドッキング」（『静岡新聞』６月２日）
「砂丘で野外美術展」（『読売新聞』６月３日）
北沢憲昭「砂の上の展覧会」（『美術手帖』８月号）
「砂丘をカンバスに・・・・」（『中日新聞』６月３日）
「雄大な砂丘に美の競演」（『？新聞』６月６日）
中村英樹「脱近代の視点」（『中部読売新聞』６月19日）
Amaury Saint-Gilles, ART: People and Places, MAINICHI DAILY NEWS, August 16

1984年

第４回浜松野外美術展
６月２日～６日　中田島砂丘および天竜川河口
磯部聡、今井瑾郎、今井由緒子、岩田紳也、遠藤利克、金田正司、川島清、城戸孝充、竹内博、田中秀穂、田中睦治、辻耕治、中村ミナト、那古蝉丸、奈良部泰三

＜関連展示＞
＊第４回浜松野外美術記録展
８月13日～25日　ギャラリー葉
９月５日～13日　ノヴァ（名古屋）
10月19日～31日　西武百貨店浜松CITY8
磯部聡、今井瑾郎、今井由緒子、岩田紳也、遠藤利克、金田正司、川島清、城戸孝充、竹内博、田中秀穂、田中睦治、辻耕治、中村ミナト、那古蝉丸、奈良部泰三（写真撮影：山本糾、ビデオ撮影：有馬純勝）
＊OPEN AIR ART：ドローイング＆プラニング展　10月８日～16日　ギャラリーラブコレクション（名古屋）
磯部聡、今井瑾郎、今井由緒子、岩田紳也、遠藤利克、金田正司、川島清、城戸孝充、竹内博、田中秀穂、田中睦治、辻耕治、中村ミナト、那古蝉丸、奈良部泰三

＜講演会＞
中村英樹：「芸術と自然の再会」（６月３日、浜松市福祉文化会館）

＜関連記事＞
中村英樹「エジプト・チベット・中田島」（『第４回浜松野外美術展』図録）

1985年

「1986年　浜松野外美術展に向けて」
12月23日～27日　ギャラリー葉
伊藤怜子、今井瑾郎、今井由緒子、岡本敦生、金田正司、城戸孝充、倉重光則、竹内博、田中秀穂、辻耕治、坪良一、中村ミナト、西雅秋、柳幸典、山岡あづさ
この年、野外美術展は開催されず、過去４回の展覧会の反省が行われた。

＜関連記事＞
今井瑾郎「美術－空間との接点」（『中部読売新聞』３月19日）

1986年

第５回浜松野外美術展
５月31日～６月６日　中田島砂丘（野外展示）
伊藤怜子、今井瑾郎、今井由緒子、岡本敦生、金田正司、城戸孝充、倉重光則、竹内博、田中秀穂、辻耕治、坪良一、中村ミナト、西雅秋、柳幸典、山岡あづさ、野々村明子（パフォーマンス）

＜関連展示＞
＊第５回浜松野外美術展　５月31日～６月２日　浜松市福祉文化会館（室内展示）
野外展示と同じメンバー
＊第５回浜松野外美術記録展　８月18日～30日　ギャラリー葉
伊藤怜子、今井瑾郎、今井由緒子、岡本敦生、金田正司、城戸孝充、倉重光則、竹内博、田中秀穂、辻耕治、坪良一、中村ミナ

ト、西雅秋、柳幸典、山岡あづさ、野々村明子（写真撮影：山本糾、ビデオ撮影：てっこん）

＜ディスカッション＞
石崎浩一郎、中村英樹、今井瑾郎他出品作家（6月1日、浜松市福祉文化会館）

＜関連記事＞
「砂丘に不思議な空間」（『？新聞』6月？日）
「砂丘の美術館」（『浜松百撰』7月号）

1987年

第6回浜松野外美術展
5月30日～6月5日　中田島砂丘
伊藤博史、伊藤怜子、今井由緒子、越川修身、金田正司、合津真治、竹内博、辻耕治、坪良一、中川猛、濱坂渉、星野暁、柳幸典、山岡あづさ、スタン・アンダソン

＜関連展示＞
＊星野暁　火の回廊（泥のフェンス、野焼き、パフォーマンス）　5月30日　中田島砂丘
＊第6回浜松野外美術記録展　8月24日～9月5日　ギャラリー葉
伊藤博史、伊藤怜子、今井由緒子、越川修身、金田正司、合津真治、竹内博、辻耕治、坪良一、中川猛、濱坂渉、星野暁、柳幸典、山岡あづさ、スタン・アンダソン（写真撮影：山本糾、ビデオ撮影：今井瑾郎）
＊吉村晃　レコーディング・オブ・ハママツ　オープンエア・エクジビション　10月12日～17日　ギャラリー葉

＜関連記事＞
無署名（今井瑾郎）のコメント（『第6回浜松野外美術展』図録）
Janet Koplos, On the Beach, Asahi Evening News, September 4

1992年

＜関連記事＞
望月良枝「浜松の砂丘に見つけた制作・発表の提言」（『美術手帖』11月号）

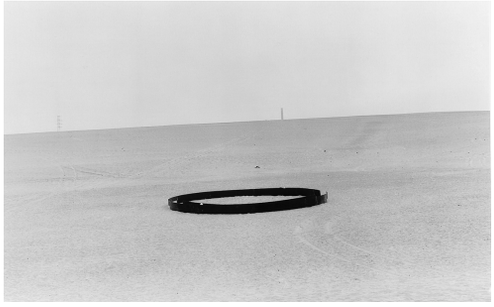

図１　今井瑾郎　1986 年

図２　遠藤利克　1984 年

図３　岡本敦生　1986 年

図４　金田正司　1986 年

図５　川島清　1984 年

図６　辻耕治　1987 年

図７　戸谷成雄　1983年

図８　西雅秋　1986年

図９　野々村明子ほか　1986年

図10　保科豊巳　1983年

図11　星野暁　1987年

図12　柳幸典　1986年